

長崎田中

輪廻 りんま

Die Metempsychose

森田草平

七

夜が明けて、戸の隙間すきまが白んでからも、二
三度母親が覗きに来て、又そつと足音を偷ん
で帰つて行つたことまで、かちかち進すす也やはちさんと知
つてぬ。知つてぬながら、矢つ張り薄團うすだまの
中なかにぐづら／＼としてぬ。そして、さつと
思ひ切つて起き上つたのは、もう大分たいぶん日ひが長

No. _____

度東京へ帰らうか知らず、

不ふ回と、そんな考へか泛んで来た。か、考へ

ただけで、別に立ち上らうの幅に細長くうかつた。

離座敷はなれの縁には、一尺ばかり日ひが当つてぬ

た。そして、その縁縁向うむかひが十坪

餘りの小さな壺の内になつてぬ。壺の内と

云つても、小さい時から見れば五葉の松と、

移うつ黄楊ぎやうの木の蔭にかくれた慣春日燈籠はるひとうろうより外

には、何の見立てもない庭であつた。その松

は、彼が子供の時分から少しも大きくな多

1020 和風集

多々たさうに見えた。で、ぼんやり庭の面を見てみる

間に、一羽の子雀かひよいと省脱石くつぬぎの上から

縁側へ上つて来た。そして、憎にくえみたさうにあ四

辺を見廻しなから、びよいと飛び廻つた。

彼は小鳥を驚かすのか可い厭やさに、じつと息を

無邪気な

殺しなから、何時いつまでもそれを見守つてぬ。



No. 99

1020 和風集